

台風第18号が近づいています！

農作物管理に最善の対策を行きましょう。

～台風第18号の強風及び多雨に対する指導要点～

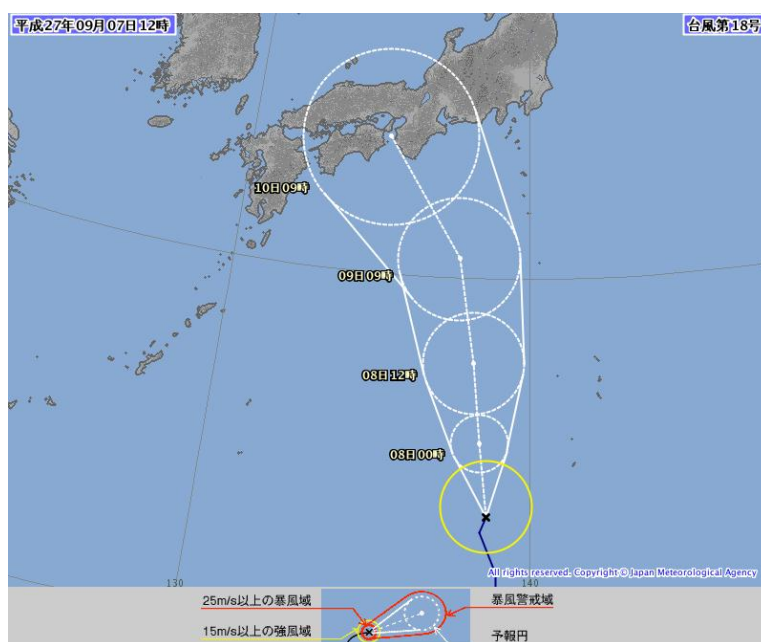
農業経営課

平成27年9月7日

8月下旬以降、長雨日照不足気味の天候が続き、収穫期を迎えた早生水稲や果菜類等への影響が顕著になりつつある中、台風第18号が週半ば頃には紀伊水道付近に達すると予想されています。9月7日15時現在では硫黄島の西南西約300km付近にあり、勢力も1000hPaではありますが、今後、高い海水温の影響で発達することも考えられ、進路によっては、本県への直接の影響も想定されます。マスメディア等の気象情報に十分注意するとともに、農畜産物の風水害に対する早めの事前対策、通過後の速やかな事後対策の徹底を図られるよう農家等の指導を行ってください。

台風第18号 【9月7日 15時現在】

- 現在、硫黄島の西南西約300kmにあって、毎時20km/hの速さで北に進んでいる。
中心気圧 1000hPa 中心付近の最大風速：18m/s
- 9月9日 15時の予報
存在地域：鳥羽市付近
進行方向：北 30km/h 中心気圧：992hPa 中心付近の最大風速：23m/s



<出典：気象庁ホームページ 台風情報 9月7日15時現在>

病虫害対策

(1) 病害

風速 6m/sec 以上の強い風は、植物体を振動させ葉や茎に傷などを作るほか、樹木では細根切断を起こし、地上部や地下部に病原体の侵入口を多くする。風だけが病害発生の原因となることは少ないが、降雨を伴うことにより、果樹の胴枯病、トマトやイチゴの疫病、各種野菜の軟腐病のような細菌病が、伝搬・感染する機会が増えるため多発につながる。従って、台風通過後には、対象病害を含めた広範囲の病原菌に効果がある殺菌剤を速やかに散布する。

(2) 害虫

強風は、害虫の飛来に大きく関係する。この時期、ハスモンヨトウが拡散し、台風通過後局所的に被害が多発することがある。また、高温、多湿条件になることで、カメムシ類の活動が活発になり果樹園に多数飛来することがある。

いずれも突発的な被害であるため、ほ場観察を十分にを行い、防除に努める。

■ 作物ごとの対策については、以下のとおりである。

水 稲

8月下旬以降のぐずついた天候により、成熟期を迎えた「あきたこまち」、「ひとめぼれ」、「コシヒカリ」をはじめ、成熟期を迎えつつある飛騨地域の「たかやまもち」、成熟期直前の「ひだほまれ」等、穂発芽しやすい品種もあり、このまま収穫できない状況が続く場合、穂発芽等の発生が心配されます。今回の台風18号の襲来により倒伏等により被害が助長される懸念があります。また、中生品種の「あさひの夢」、本県平坦地の主力品種「ハツシモ」もやや長稈傾向のまま傾穂期に穂揃期を迎えつつあり、風雨の強さによっては登熟不良等、大きな影響を受けることになるので、引き続き圃場の状況把握に努め、台風の接近等に伴う各種障害に対処できるよう準備する。

○風 害

風害は風速毎秒 10m を超える頃から始まり、風速・継続時間・温度・湿度・水稻の生育ステージにより被害程度が異なる。台風に伴う強風は、雨上がり後の吹き返しや台風一過のフェーン現象が高温で乾燥した強風をもたらすことがある。

乳熟期から糊熟期には穂ズレにより籾の変色、着色粒・奇形粒の発生を助長する。黄熟期には穂重が重くなることから倒伏しやすくなり、登熟不良とともに品質の低下を招く。

○水 害

水害は、冠水に伴う同化作用の低下が最も大きく、冠水日数が長期化した場合、特に出穂2週間前～出穂期頃の冠水が減収を著しくさせる。出穂期約1カ月後の黄熟期頃からは、品種によっては穂発芽しやすくなる。しかも、倒伏して水に浸かると、穂発芽をさらに助長させてしまう。たとえ品種の穂発芽が「難」であっても、その後の気温推移によっては穂発芽するので、通過後の対策に万全を期したい。

(1) 事前対策

- ・成熟期に達したほ場はもちろん、帯緑籾率 15%に達したほ場についても、可能な限り収穫作業を進める。なお、乾燥調製施設の荷受体制の整備は完了しておく。
- ・低地及び排水不良地では、排水ポンプの確保・整備を行う。
- ・排水路からのオーバーフロー等による逆流水害を防ぐため、水路の補修・ゴミ等の除去を行う。
- ・畦等の倒壊をなくすために点検・補修する。
- ・降雨時に自然落水しないよう排水口を補修しておく。
- ・表土の流亡を防ぐため、また急激な蒸散による水分ストレスを回避するために入水する。
- ・水位は深水とし、風による稲体の揺れを少なくし、葉の損傷・穂ずれを軽減させる。

(2) 事後対策

- ・冠水した場合は、穂先や葉先が少しでも水面上に出ていれば、被害が軽くなるので、一刻も早い排水を行う。
- ・倒伏した場合は、稈や葉の挫折・損傷に注意して株を起こす。
- ・台風後は白葉枯病・穂いもち・籾枯細菌病等が発生しやすいので、（圃場状況確認の上）フサライド剤、カスガマイシン剤、オキシリニック剤等による防除を行う。ただし、それぞれの農薬には使用基準（収穫前日数）があるので注意する。
- ・台風一過の晴天と吹き返しにより蒸散が激しくなるので、倒伏しなかった圃場でも、数日間湛水状態を保つ。

大豆

7月下旬に播種された平坦地の晩生品種フクユタカも開花終盤に差し掛かっており、早いほ場では莢伸長期直前の状況にあり、風雨の影響を最も受けやすいステージにある。早く播種された大豆は大型化しているが、播種が7月下旬以降に集中したため、生育は緩慢で、このところの多雨・日照不足により地下部の生育も不十分である上、中耕培土作業も思うように実施されていない。今回の風水害により湿害の助長、倒伏の発生が懸念される。また、現在のところハスモンヨトウの発生は目立っていないが、現場の発生状況を見て、今後の防除につなげる必要がある。

○風水害

強風では、葉の損傷・茎折れ・倒伏が発生し、莢数の減少や不完全粒・不稔莢の増加が起こる。例年、秋雨により増加する早生品種の腐敗粒、強風による葉の傷から増える中晩生品種の葉焼病は、その一因が風雨によりできた傷口から雑菌が入ることが考えられているので、台風通過後の適切な対応が重要となってくる。

大豆は他の作物に比べ湿害・冠水害に弱い作物である。開花期以降は多量の水を欲するものの、根域に所在する根粒菌の酸素不足を引き起こしてしまう冠水は、登熟中期の5日間の冠水で全て枯死、黄熟期以降では1日の冠水で30%が屑粒に、4日の冠水で80%が屑粒になった事例もあるので、圃場の状況に注意する。

(1) 事前対策

- ・排水溝などの点検を行うと共に、排水口・排水路の保守点検を行う。
- ・低地及び排水不良地では、排水ポンプの確保・整備を行う。

(2) 事後対策

- ・冠水・滞水した圃場は、一刻も早く排水に努める。
- ・土壌水分が高い場合は、無理な作業は避け、天候やほ場条件の回復を待ってから着実な作業を行う。
- ・茎や葉の挫折・損傷に注意した丁寧な起こしを行う。
- ・根が露出した株は根が乾かないように土寄せする。

野 菜

○風 害

強風による野菜の被害には作物体への直接被害と施設栽培における施設への被害がある。施設被害の程度は、施設の強度によって異なるが、風速の影響を最も受ける。地形や台風のコースによっても風速が異なるので、気象情報、過去の風速、風向きなどを十分考慮に入れて対策を立てる。

<強風対策>

常に新しい気象情報の入手に留意し、施設等の補強に努める。

(1) 事前対策

- ・施設では筋交い・支柱、横張り等により補強に努めるとともに、施設を密閉し、フィルムの破損、はがれに注意して風を吹き込ませないようにする。フィルムがゆるんでいると強風にあおられて被害を生じやすいので妻面の補強、マイカー線、ラセン杭等の点検を行う。
- ・強風（20m/sec 以上）が予想される場合は、パイプハウス等では被覆資材の除去も考える。
- ・露地野菜、背の低い作目及び横に伏せても生育に極端な影響を及ぼさない野菜については、苗を横に伏せて寒冷紗や不織布等で強くゆるみのないようにべたがけをして、風雨の過ぎるのを待つ。
- ・栽培ほ場での防風ネットは4mm 目程度のものを利用するが、強風にあおられないよう強度に留意して設置する。破風効果は防風ネットの高さの7～10 倍あると言われているので、ほ場条件で高さを設定する。
- ・台風通過後の防除、葉面散布等は速やかに行う必要があるため、資材などは事前に準備を行っておく。

(2) 事後対策

- ・施設が被害を受けた場合は、地区の生産組合員と協力して応急補修を行う。台風通過後は品薄状況となることが多いため、できる限り出荷するよう、地区毎に状況を判断しながら施設の応急修理と作物の回復処理に努める。
- ・べたがけ被覆資材は台風通過後の状況により、速やかに除去するか、しばらく被覆を続行するかを判断する（晴天で強風が続く場合等）。
- ・台風通過後、風による傷口からの病原菌の侵入を防ぐため、速やかに防除を行う。特に軟腐病菌は、ナス科、アブラナ科、キク科、ユリ科、セリ科等多犯性であり、台風や豪雨により問題となるので、台風通過後は銅剤などで防除を行う。また、出来るだけ早く液肥等の葉面散布を行い、草勢回復に努める。

- ・回復の見込みのない場合はまき直し・植え替えをするか、他の野菜に転作する。

○水 害

水害は浸水・冠水の時間及び水温等によって被害程度が異なる。また、水害は野菜の種類によって被害に対する強度が異なる。特に水田輪換畑では危険度が高い。

一般に土壌空気が10%以下になると、根の呼吸に必要な酸素が不足し、根腐れの原因となる。地温や水温が高いほど、植物に有効な土壌中の溶存酸素量が減少する。

下記の表は野菜の種類別冠水抵抗性であるが、冠水でも流れている真水では滞水している濁水に比べ、いちご等では2倍以上の抵抗性がある場合もある。

また、風による機械的な損傷に加え、豪雨による叩き付けにより、そこから侵入する病害、湿害等2次的障害による被害の拡大も考えねばならない。

■第1表 野菜の種類別冠水抵抗性〔渡辺ら（1948）〕

冠 水 程 度	作 物 名
数時間で障害を受けるもの	だいこん、はくさい、なす、えだまめ
1日間	さつまいも、にんじん、ごぼう
数日間でも殆ど影響のないもの	さといも

<浸冠水対策>

(1) 事前対策

- ・地表水が速やかに排水できるような落水溝を設置する。
- ・豪雨による傷害や泥の跳ね上げ、土の流亡を防ぎ、土壌水分の安定を図るため敷きワラ、敷き草を行う。

(2) 応急対策

- ・排水路の確認、広域排水路の障害物除去、ポンプによる強制排水により地表水を速やかに排除するとともに、遮水壁（ビニール等）による雨水の浸入防止を図る。
- ・冠水状態で強制排水が難しい場合は、滞水させることなく、新しい流水が確保できるよう、地域状況を把握し最良の方法を実行する。
- ・養液栽培等で源水が懸濁した場合は、速やかな復旧を図る。

(3) 事後対策

- ・排水が終わり次第、キャプタン剤（使用基準はホームページ等で確認すること）などで、洗浄を兼ねた予防散布を行う。
- ・根が洗い出された場合は速やかに土寄せを行うとともに、地中に酸素を補給するため土壌の乾き具合を見て軽い中耕を行う。
- ・肥料が流亡している場合は野菜の回復の兆しが見えたら500～600倍の液肥を施し、速やかな草勢回復に努める。
- ・根菜は地下部を、果菜は生長点や花芽を良く観察し、回復の見込みの無い場合はまき直しや作目変更を考える。

<品目別対策>

○トマト

- ・少しでも収穫が可能なものがあれば収穫して出荷する。
- ・ほ場内への浸水があった場合は速やかに排水し、それ以上浸水しないよう対策する。

- ・ビニール等を撤去した場合は、速やかに被覆して、傷んだ茎・葉・実を除去し適切な防除を行う。夏秋栽培では、収穫の継続が可能であれば、直ちに防除を行う。
- ・かいよう病等細菌性病害が認められる場合は、伝搬して壊滅的な被害を発生させる可能性があるため台風通過後には直ちに銅水和剤などで防除する。疫病が確認された場合は、発病葉および発病果を完全に除去し、3日おきに3回防除を行う。また、高温性の根腐病も各地で認められるので、疫病とともに十分注意を払う。
- ・冬春向けの育苗中の苗については、一度疫病等の徹底防除を行い定植する。また、樹勢の低下により灰色かび病、葉かび病等が発生するので施肥、灌水により樹勢回復を行う。

○きゅうり

- ・年内の抑制作型の出荷が始まっているが、少しでも収穫が可能なものがあれば収穫して出荷する。
- ・ほ場内への浸水があった場合は速やかに排水し、それ以上浸水しないよう対策する。ビニール等を撤去した場合は、速やかに被覆して、傷んだ茎・葉・実を除去し、ハウス内の湿度をやや高めに保ちながら、防除や葉面散布等を行って、一日でも早い草勢の回復を図る。
- ・台風通過後は、適切なハウス内環境の管理に努め、草勢を安定させ、うどんこ病等の防除を実施する。

○ほうれんそう

- ・ほ場内への浸水があった場合は速やかに排水し、それ以上浸水しないよう対策する。
- ・収穫期に達しているものについては収穫を急ぐとともに、風水害による被害を受けた場合には、出荷することが可能かの判断を行い、出荷できない場合は速やかに、まき直しを行う。回復が見込める場合は予防剤による集中的な防除を行う。

○なす、ピーマン

- ・少しでも収穫が可能なものがあれば収穫して出荷する。
- ・ほ場内への浸水があった場合は速やかに排水し、それ以上浸水しないよう対策する。
- ・台風などで浸水あるいは冠水すると疫病等の発生が多くなる。圃場の排水に努めるとともに、台風通過後は防除を徹底する。

○いちご

- ・現在、ほとんどの地域で、定植直後か定植中かと思われる。
- ・育苗中の苗が残っている場合は、引き続き炭疽病等の病害の発生及びまん延の防止に努める。
- ・育苗・本播ともほ場内への浸水があった場合は速やかに排水し、それ以上浸水しないよう対策する。特に定植直後のほ場内の冠水には特に注意する。また、畝が大変崩れやすい状態にあるので、崩れた場合は速やかに補修する。
- ・定植後に強い風雨にさらされた場合は、炭疽病や萎黄病などとともに芽枯れ病の発生にも注意して、速やかに防除する。

○アブラナ科野菜

- ・ほ場内への浸水があった場合は速やかに排水し、それ以上浸水しないよう対策する。
- ・秋冬向けの品目は定植したばかりである。畝の崩れや根洗いなどあれば速やかに補修す

るか植え替える。また、可能なものはまき直す。

- ・多雨等により軟腐病、黒腐病、黒斑細菌病等の細菌性病害が多発することがあるので注意する。強い雨によって土粒とともに病原が飛散し作物に付着し、風雨による傷口は侵入感染を容易にする。特に初発生した後の曇雨天は激発を招くことから、細菌性病害に効果の高いオキシリニック剤や銅水和剤等を散布する。

花 き

(1) 事前対策

- ・多雨によりほ場が過湿になり根傷みが発生する恐れがあるので、排水路の整備等による排水対策を行う。
- ・露地ギク等では、風による倒伏の恐れが高いためフラワーネット、支柱等で補強する。
- ・ほ場周辺に飛散するものがないよう整備、整理する。
- ・養液栽培では水源が汚染されると根部病害が発生し甚大な被害が発生するので、水源が汚染されないように注意する。

(2) 事後対策

- ・風による傷口からの病原菌の侵入を防ぐため台風通過後、速やかに防除を行う。
- ・冠水は酸素不足から根腐れを生じるとともに、土壌病害の発生の原因となるので、冠水した場合は、速やかな排水に努める。
- ・台風通過後、出来るだけ早く液肥等の葉面散布を行い、草勢回復に努める。
- ・露地ギク等で倒伏したものは、支柱を利用してできる限り早めに起こす。

果 樹

(1) 事前対策

- ・主枝・亜主枝等が裂けないよう支柱等を利用し枝を補強する。特に、発生角度のせまい枝は被害を受けやすいので、針金等を利用し結束しておく。着果量の多い枝、高接ぎした枝は、特に注意が必要である。すでに誘引等をすましている場合でも、結束を確認し支柱を強固なものに変える。
- ・なし・ぶどう等の棚は、強風によりあおられやすいので、支柱やアンカーを増やし補強しておく。また、わい化りんごでは根が浅く倒伏しやすいので、棚への結束の確認をしておく。
- ・果実落果を防ぐため、なし・ぶどう等では園の周囲をネットで囲う。ただし防風ネットは強風を受けた場合、非常に大きな力を受けるので、十分な補強をしておく。特に収穫時期が近づくほど、落果被害が大きくなるので対策を徹底する。
- ・多雨により園内が滞水すると、根の呼吸が阻害され養水分吸収が不可能となり、地上部の生理的活動が低下するので、明渠を設置する等、事前の排水対策を徹底しておく
- ・収穫可能な果実はできるだけ収穫しておく。その際には農薬の使用基準（収穫前日数）に留意する。

(2) 事後対策

- ・果実や樹体が損傷を受けた場合は、まず被害程度をよく確かめ、防除・摘果・せん定を

実施する。

- ・倒伏した樹は、根を傷めないように注意してできるだけ早く起こし、支柱を添えて固定する。枝裂け等は、修復可能な枝は直ちに起こし、再度裂けることのないよう補強する（ボルト等利用）。
- ・傷果・軟化果等は早めに摘果する。また落葉がひどい場合は、その程度に応じて摘果し樹体への負担を軽減することも考える。落果が多い場合、追肥量を控え、枝の徒長や二次伸長を防ぐ事も必要である。
- ・滞水した場合、外的変化が現れてからは手遅れになるので、できるだけ早くほ場の排水対策を徹底する。
- ・果実や葉の傷から病気が発生しやすいので、台風通過後天候が回復したら、早めに殺菌剤を散布する事も考える（ただし、ぎふクリーン農業等の基準には十分注意する）。
- ・カキでは、台風に伴う豪雨が土壌中の肥料を流亡させるため、落葉病やうどんこ病の発生を助長する。また、炭疽病や *Pestalotiopsis* 属菌による葉枯れ病が発生することがあるので注意する。

茶

- ・炭そ病は、2番茶後秋芽の発生時期に長雨曇天が続くと多発する。台風によって病原菌の飛散が拡大すると、その後の天候によっては激発するので注意が必要である。雨間防除の効果も認められる。
- ・豪雨により肥料が流亡したままにしておくと、肥料が欠乏しダニなどの発生が多くなるので、適正な施肥を行う。

飼料作物

(1) 事前対策

- ・転換畑等で排水状態が悪い圃場では、湿害により生育が不良となったり、機械作業性が低下する。排水溝の点検など速やかに排水対策を講じる。
- ・風雨による長大作物の倒伏は、減収と土砂混入などによる品質低下を引き起こす。早めに収穫し給与またはサイレージへ仕向ける。
やむを得ず予乾が不十分で、水分含量の高い原料草を用いてサイレージ調製を行う場合には、ビートパルプや乳酸菌などの添加物を利用し良好な発酵品質を保つよう努める。

(2) 事後対策

- ・牧草の草丈が伸びている河川敷草地や転換畑などで、泥砂を伴った濁水による冠水があった場合、天候やほ場の回復を待ち、濁水に使った牧草を刈り払い・除去して、次番草の生育促進を図る。除去した草は、エサとして牛に給与しない。

畜舎等

(1) 事前対策

- ・突風に備え畜舎の扉、窓等の点検補強を事前に行う。また、浸水対策として畜舎廻りの排水溝や樋の点検清掃による排水対策を行い、畜舎、堆肥舎への雨水流入を防ぎ清潔な畜舎環境の維持に努める。飼料は倉庫・畜舎内に入れ汚水がかぶらないようにする。

(2) 事後対策

- ・畜舎等が浸水した時は速やかに排水対策を取るとともに通気を良くし、内部の消毒、乾燥を行い疾病等の防止に努める。
- ・踏み込み消毒槽は雨水や泥が混入すると殺菌効果が弱くなるため、点検頻度を増やし早めに消毒薬を交換する。